私が幼児教育を志した頃(14)

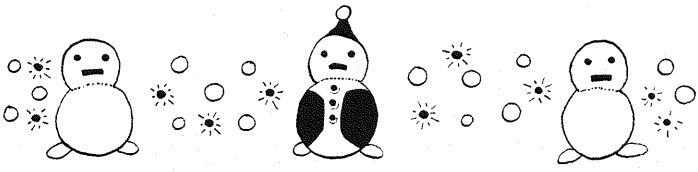
―二十世紀の終わりに―

津守　真

家の「におい」

家の中にはそれぞれ独特の「におい」がある。台所口から入ってその「におい」をかいだ途端に、その家庭のすべてが思い出される。私が米国で泊まった十三軒の家庭のそれぞれに違った「におい」があった。

一九五二年四月にひと月泊めて頂いた四軒目の家庭、ロフリン氏の家の台所は、いろいろのものがごった返していた。流しには食べたあとの皿、料理のあとの鍋が積み重ねられて、片隅のテーブルの上には遊んだままのトランプが散らばっていた。私が



皿洗いを手伝おうとしたら、あなたは学生だからと許してくれなかった。ロフリン氏の家は小さい。台所の隣が私の寝室で、それと向かい合って夫妻の寝室があり、それに居間があるだけである。ロフリン夫妻には子どもがなかった。

ロフリン氏は小学校を終えてすぐに郵便配達夫をして二十年過ごした後、本局勤めになり、いまは本局の小包係で、やっと生活も安定して来た。子どもがないから夫妻とも遊びごとが好きである。トランプ、ボーリング、釣り、映画など、日曜の朝起きるとロフリン氏はパジャマのまま、新聞のクロスワードパズルに熱中する。ある晩、食事のあと夫妻はソファで新聞を読んでいた。私はそばで本を読んでいた。ロフリン氏が疲れたから寝ると言ったら、夫人がトランプでもやればなおるだろうと言った。ロフリン氏がいつものぼそぼそした調子で「彼は本を読んでいる」と言った。私が一緒にトランプをやると言ったら大喜びしてとうとう一時間半もカナスタをやってしまった。

「怒りの葡萄」

私は朝の授業が遅い日や、夕方早く帰った時には台所で何杯もコーヒーを飲みながら話し込んだ。ロフリン氏夫妻はアメリカの社会の悪に対して心の底からの憤懣をもっていた。「美術館を建てた大金持ちは不動産会社をしているが、昔安くでインディアンから無理やりにとりあげた土地を高い値で売っているのだ。美術館を建てた

木材は他人の林から勝手に取って来たものだ。」ロフリン夫人がそう言うと、ロフリン氏が「そうだ、そうだ、それは確かなことだ」と相槌を打つ。「ジョン・シュタインベックの小説『怒りの葡萄』に書いてあるとおりだ。十五年程前にミネソタ、ダコタ、モンタナにかけて数年間干ばつが続いた。それに苦しみあえいだ農民が更に西部に移住して行った。その裏には金持ちの勝手な振る舞いがある。シュタインベックの小説はみな本当のことだ。私たちは若いときからまじめにこつこつ働き続けて、いつも生活苦と戦って、すこし余裕ができてきたのはやっとこのころだ。」ロフリン氏は口の中でぶつぶつと独り言のようにそう言った。

ある日、私は大学の友人、ジョン・ジェニーに誘われて、ミネアポリスでも立派な教会の青年グループの夕食会にいった。彼は医学を勉強しているが、重箱の隅をつつくような研究をやるよりも自分は臨床医になって医者のいない土地にいくつもりだと言った。彼は戦争中、兵隊でサイパンに行った。サイパンといえば日本軍が玉砕した地である。彼は潜水母艦に乗っていたという。昭和十九年六月の新聞の見出しは忘れ難い。「ああサイパン島」という大木敦夫の詩も記憶に新たである。「戦は熾烈になっている。死命をかけて同胞は戦っている。私がサイパンにいたら、やはり命を的にして敵に備え、敵と戦っていることだろう。」と私の日記には記されている。その敵がいまは友として一緒に話し合っている。彼も戦争体験が人生を変えたという。ジョン・ジェニーは、それまでテクノロジーを学んでいたが復員してから医学部に転

学した。会のあとスクウエアダンスをしていた女の子達が全員帰り、ジョンと私と数人の男子学生とF牧師が残った。F牧師が突然、ライフルをやろうと言い出した。教会の地下室に射撃場があった。日本の基督教会の常識では考えられないので、私は驚愕した。F牧師が鉄砲をもってきて皆で代わり番こに射撃をやり始めた。地下室だからものすごい反響がある。私はたまらなくて、帰りかけた。皆が引き留めた。F牧師はやり方を知らなかったら教えてあげるからと一生懸命に言った。私は中学生のとき射撃の選手をしていたから負けないだけの自信はある。しかし戦争が終わったとき、私は生涯鉄砲を手にするまいと思った。F牧師は、これは単なる遊びなのだからと言ったが、とっさに自分が加わることはできなかった。私は手短に話して、ひとりで帰ってきた。

ロフリン氏は、この国は基督教国と称して全く何たることかと嘆いた。

季節はすっかり夏になった。芝生が青々として木々が新芽を吹いてきらきら光っている。私は頭をまっすぐ上げて自分の足で歩もうと思った。

ロフリン氏夫妻との別れ

ロフリン氏夫妻は心から親切な人である。自分で蒔くつもりで取り寄せた朝顔の種を半分日本に送るようにと私に分けてくれた。その芽が出たばかりの頃に私は次の家に引っ越した。夫人は、この花が咲くころにまた来てくれ、もし来なかったら私は怒

りますよと言った。それから数回ロフリン氏夫妻と映画を見に行った。けれどもとうとう花を見に訪ねる機会を逸してしまった。そのうちに、ロフリン氏は郵便局を退職し、その退職金でフロリダに行った。年が明けて五月には帰ってくるからまた会おうとフロリダに発つ前日に電話で話したのだが、そのままになってしまった。それから一度、ロフリン氏の家の前を通ったとき、わざわざ玄関のベルまでおしてみたが、カーテンはすっかり閉じられて、だれもいる気配はなかった。

二十世紀の終わりに

この原稿を書いている時はまさに戦後五十五回目の八月である。夾竹桃の赤い花と、地に泌み入る蝉の声はかつての日と同じだが、あの頃は都心でも鳴いていた「蜩（ひぐらし）」の声はいまは聞こえない。この間に日本は経済繁栄し、そしてバブルが崩壊し、一転して不況に陥った。近隣諸国に対する戦後処理の問題もいまだに燻り、内には大きな犠牲を払った戦争の反省の総括もないままに、憲法改正、教育基本法改正の声がしきりである。世界もまた、平和は後退し、核抑止力、軍備増強の競争である。

五十年前に私が米国の生活で発見したことは、国と国は戦争をしても、人と人が直接接すればどこの国でも人間は皆同じである、軍部や政府の宣伝や噂を信じてはならないということだった。米国の家庭での体験を通して私はそのことを記したいと思っ

た。

私を泊めてくださった米国の家庭には、富裕な階級も、勤労階級も、また知識階級もあった。あの時代は戦争直後で平和への願いは、いまよりもっと強くあった。私が泊まっていた家庭のなかには世界連邦運動（世界の国から軍隊をなくし、世界警察を作ればよいという平和運動）に熱心な人もいた。戦争中それぞれの国で何を考え、何をしていたかを私共はしばしば夜遅くまで語り合った。一般に原爆への罪悪感はいまよりもずっと強かった。近年では、米国に行っても原爆は必要悪だという見解が蔓延しているが、五十年前にはそうではなかった。

第二次世界大戦後、半世紀を経て、米ソ冷戦の時代も終わり、いくつもの民族戦争と難民の時代を経験し、平和の定義も簡単でなくなってきた。人を殺し人が殺される戦争をどうやって避けることができるのかも、単純な答は得られないのが現代である。

二十世紀日本人の悲惨な戦争体験から言えることは何か。

私はこの期間を生きて、戦争の最大の反省は、あの時代に人が本当に思うことを言えなかった、言わなかったことであったと思う。言うべきことを言わなかったことが日本の社会をだめにした。それを言ったときには非国民というレッテルを貼られる社会風土が根底にある。つまり、組織（国、軍隊、学校など）の方針に合わないと排除してきたのが日本の社会だった。翻って今日はどうかと言えば、この点はあまり変

わっていない。皆と違う人は依然として生きにくい。他人と違う髪形、違う意見、違う能力の者はのけ者にされる。組織の内部に入ると、個人が人間として振る舞えなくなる。学校でも「教師」の立場になると子どもとの接し方が人間的でなくなる。これはどこの国にもあることだが、日本ではとくにそうである。この連載を書き始めたとき、君が代の法制化が国会で決められようとしていた。私の世代にとって、「君が代」は、無念の思いを抱いて戦死した友の記憶と結び付いている。それから一年たったいま、それに反対意見の教師が処罰の対象となっている。これでは教師は一層組織の枠のなかに固まって、教育でもっともたいせつな「ひとりの人間として子どもと接する」ことが阻まれるだろう。だれもが自分らしく振る舞い、相手を人間として尊重する社会の実際の場―学級―をつくることはこれからの日本の教育の課題である。五十五年前に敗戦で学んだことをまじめに反省し、平和のための思想を実際的に作ってゆこうではないか。